

氏 名 (国 籍)	辛 ^{しん} 賢 ^{ひょん} (韓 国)
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 2739 号
学位授与年月日	平成 14 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	哲学・思想研究科
学 位 論 文 題 目	漢易術数論研究
主 査	筑波大学教授 文学博士 堀 池 信 夫
副 査	筑波大学教授 中 村 俊 也
副 査	筑波大学助教授 文学博士 佐 藤 貢 悦
副 査	筑波大学教授 博士 (文学) 松 本 肇

論 文 の 内 容 の 要 旨

本研究は、漢代易学における術数論を中心とする諸問題に関して、これを通時的に考察するものである。研究の具体的な対象は、戦国末～漢初の成立と見られる『馬王堆漢墓帛書周易』から、前漢中末期の孟喜・京房易、そして前漢末期の揚雄の太玄易に至るまでである。これらを通じて明らかにされる術数論の問題とは、『易』の六十四卦の組み合わせ構造をいかに推理的合理性のもとに構築しえているのかということに他ならない。本研究はそうした易学の術数論の歴史的展開の実相を明らかにし、さらにその思想史的意味を明らかにするものである。

漢易の術数論的方面の研究というテーマは、従来それほど盛んに行われてきたわけではなかった。それが持つ数理的な側面と占術的側面の二重の困難性が、研究を妨げてきた大きな原因であった。漢易というと、従来は儒教経学の筆頭経書としての『易』研究の方面がはるかに盛んだったのである。よって漢易の術数方面に関わる専著は、日本においては鈴木由次郎『漢易研究』（明德出版社、一九六三）、小沢文四郎『漢代易学の研究』（明德印刷出版社、一九七〇）の二著を数えるに過ぎない。しかしこれらの研究水準は決して低いものではなく、とりわけ鈴木氏の『漢易研究』は「消息」「卦氣」「世応」「互体」などの術数的易技法を追求した点、先駆的な業績であった。そしてこの書の画期的意義は、その頃まで中国哲学の学界を呪縛していた儒教一尊的な『易経』解釈を、術数的視角を導入したことにより、それを広い自由な学問研究の場に引き出したことであった。

本研究は、以上のような鈴木氏の成果を基盤に踏まえつつも、鈴木氏が説き及ぶことのなかった、易の術数的技法の全体的な基幹を形成する六十四卦のもつ数理性、数理的合理性への探求を中心課題として進められた。漢易を貫くその数理的関心の意味は、数理的普遍性の上に構築される様々の易理論の真理性・合理性を担保しようということにあったといえるが、本研究はそうした視点を一貫させることにより、新たな漢代易学史を描き出している。

本論文は以下の通り、序論と本文五章、及び結語からなる。

序論

第一章 『馬王堆漢墓帛書周易』の概観

第二章 六十四卦の「数」と「理念」

第三章 孟喜・京房の卦氣六十四卦構造

第四章 京房の八宮世応構造

第五章 『太玄』の八十一首七百二十九賛

結語

まず序論において、本論文の構想および研究方法について論述する。

続いて第一章では近年中国で発掘発見された易関連新出土資料『阜陽漢簡周易』『秦簡牘藏』を取り上げ、とくにそれらにおける卦画の形態、卦名の異同等を検討し、秦漢期当時の易の実態を考察する。これによって、易の卦画がすでにこの時期において数との深い関連を持っていたことが明らかにされ、とくに陰陽二卦に収斂する以前の、一から九に至る数字を重ねた数字卦が、数との深い結びつきを担っていたことが明らかにされる。

第二章では、前章で得られた結果を踏まえ、実際に漢易の術数論の問題に踏み込む。まず最初は、一九七三年、中国の長沙市で発見された『馬王堆漢墓帛書周易』（『帛書周易』）の六十四卦配列の意味が考察される。『帛書周易』の六十四卦は現在普通に用いられている『周易』（通行本『周易』）の卦配列とは全く異なる、従来知られていない特異な卦配列をもつものだった。この特異な卦配列については、その持つ意味や数理的正確などを論ずる論考が中国を中心にいくつか現れたが、未だ完全に論理的といえる説明は現れていなかった。本研究はこの『帛書周易』の特異な卦配列について、数理的な観点から改めて解析し、その配列原則の方程式を導き出した。それは、これまで重卦という名称で知られていた、卦を重ねる方法にもとづく数理によって構成され、しかも陰陽にもとづく厳格な数理が貫かれていることが明らかにされた。そしてそこには、次代の孟喜・京房易の先蹤を為す要素が存在していることもあわせて明らかにされた。

第三章は、前漢易学の代表的易学者である、孟喜・京房の卦氣説の六十四卦構造の分析である。この時期の易学は、単に易の陰陽の数理のみならず、そこに天文・律暦・陰陽五行などの要素が組み込まれる方向に進み、六十四卦の構造が複雑性を増してきた。孟喜の卦氣説では、暦日のシステムが六十四卦組織の骨格として取り入れられた。それは漢初の『帛書周易』以来の六十四卦の数理構造をさらに飛躍させて、宇宙論的メカニズムまで拡張したものであった。第三章後半は、孟喜に続く京房の八宮世応六十四卦構造の卦氣説を検討する。京房の八宮世応構造は、孟喜の卦喜説と異なり、十干十二支二十四気二十八宿などの暦数術数的要素を取り入れた非常に複雑なものである。そのため、従来は表面的な研究はなされていたものの、全体像は未だ明らかにされていなかった。そこで本研究においては、八宮世応の六十四卦組織を卦画の側面から照明をあて分析した。

第四章では、京房の八宮世応構造から一歩進んだ八宮の「積算」構造が分析される。積算構造は、近代になってからの易研究ではまったく取り上げられることのなかったものである。その理由は、その数理の持つ一見した所の複雑性によるものであるが、本研究ではそれを真正面から取り上げて分析し、その結果、積算構造は漢易の術数的技法の根底的受け皿をなすものであることが明らかにされた。

第五章では、前漢末の学者揚雄の太玄易の研究である。太玄易は漢の揚雄によって易に擬えて作られたものである。かつて津田左右吉はこれに対して「さしたる新味のない」ものとの評を与えたが、この批評のように太玄易は従来あまり意味のあるものとは考えられてこなかった。ところが近年に至り、太玄易の構造を見直し、前漢易思想史における位置づけを新たに試みるいくつかの論考が発表され、それが漢代思想史において重要な意味を持っていることが明らかになってきた。しかし、それらの研究も太玄易の数理構造に関しては追求が不足しており、約千年前、北宋の司馬光が矛盾であると指摘していた問題（『太玄』における「首」と「賛」との数理的関係が整合的に説明できなかったこと）については解決することが出来ず、司馬光のままに矛盾的なものとされてきていた。しかし本研究はこの問題を、全く矛盾なものではなく、数理的に一貫した合理的統一構造として説明できることを証明した。あわせて太玄易の無矛盾の構造は、易と暦日を結合してすべてを数理的合理性において完結することこそが真理性を示すとする漢代易学の思想の、集大成であることを論証した。

結語においては、以上本文全五章において考察してきた結果を振り返り、その思想史的意味、すなわち前漢の

易学史は、前漢律曆思想と密接に関連しつつ展開したものであることを指摘し、さらに後漢期に向けての思想史的展望をまとめて全体を終えるのである。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、前漢初期から末期までの易学の術数論の展開について、当時の易思想の持っていた数理を媒介とする真理性への志向を明らかにすると同時に、それを支えた実際の技法を明らかにすることによって、漢代易思想史の新たな側面を描きだしたものである。その論は、従来の漢代易思想史研究の成果を踏まえつつも、しかし従来は知られていなかった資料である『阜陽漢簡周易』『秦簡牘藏』『馬王堆漢墓帛書周易』など新資料を活用し、また京房の積算構造など従来はまったく見過ごされるか、研究のメスの行き届くことのなかった問題に新たに照明を当て、また太玄易の「首」「賛」問題のように、宗の司馬光が矛盾として指摘して以後、千年近くの間アポリアとされてきた問題を解決するなど、極めて独創的な発見と思索が各所に溢れている。著者の鋭敏で柔軟な思考能力・才能を十二分にうかがわせるものといえる。それゆえに本研究は、明らかに従来の漢代易学研究を一步も二歩も突き抜けたものとなっており、斯学において新たな地平を開く優れた研究成果であるといえる。とはいえ、本論文で扱われた問題は、ある意味で非常に限局された高々度に専門性の高い領野であり、この成果を、より広く漢代思想史一般に拡大適用した場合に同様の成果が見込めるか、あるいはまた易思想史に限定するとしても、時代を降った次の後漢期においても本研究の方法が適用可能かどうかという方法論的課題はまだ残されており、今後の著者の精進が求められるところである。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。